

14. 九月五日頃迄に安東及撫順、本溪湖附近の部隊行軍により北陵收容所に入る。

15. 九月十日軍籍に在りたる一校市民（奉天）約六千名北陵收容所に收容せらる。

16. 九月十四日より作業大隊の編成（一大隊千名）及輸送を開始し同日より毎日三箇列車宛奉天より北上す。一箇列車は約千五百名にして一箇大隊の装備は個人装備の外自動貨車二、牽重車五、馬匹六なり。

セ其の他の状況

ハ在留邦人、開拓團の状況

軍は八月十日轉進命令を受領すると共に在留邦人も後送せしむべき指示に接し、直ちに在郷家屯滿洲國興安總省連絡參事官及當時防衛對策等の爲集合しありたる興安西省各旗參事官に對し軍司令部に集合を求め一校状況を説明し、十二日中に在留邦人及開拓團

0587

員を鐵道沿線に集合せしめて後退する爲の處置をとらん事を要望し、列車の配當は軍司令部に於て増當し且奥地等にて傳達遅延せるものは集結遅れたる場合に於ても軍用列車に便乘せしむる旨附加し迅速なる處置を執らしむると共に、各兵團にも連絡して此の趣旨を徹底す。四洮線沿線附近の居留民は十二日引揚列車により或は軍用列車により通化方面に後退せるも、奥地の居留民は連絡遅延の爲列車によるを得ず、各機關の判断に基き徒歩により後退せるも、興安附近居留民は徒歩により後退中蘇軍に遭遇し多數の犠牲者を生ぜるものゝ如く、興安西省奥地の居留民は徒歩により奉天附近に後退す。

蘇人軍屬の家族は軍司令部の家族は四平及鄭家屯に、第百七師團の家族は阿爾山、五叉溝附近に在りしが、前線の家族は戦闘開始と共に一般居留民と共に列車により鐵道遮断の直前に後退し得たり。軍司令部の家族は鄭家屯附近居留民と共に通化に後退し停戦

0588

後撫順に移動す。

2 滿洲國政府機關の狀況

開戦後戦況逼迫に伴ひ諸所に叛亂起りしと以前より國民政府と氣脈を通じありし滿系官吏は全く活動せず保身にのみ追はれ完全に無政府状態となる。日系官吏特に蒙古地帯に在りし參事官等は情報の傳達、遊撃活動、居留民の指導に身を挺して活動せり。

3 滿洲國軍及警察の狀況

滿洲國軍は開戦前情勢の急迫に伴ひ逐次其の兵種を制限し大部を工兵、輜重兵に改編し、其の裝備も弱体化し兵器は日本軍に移管しつゝありしが、開戦と共に逃亡者續出し爲に日系軍官の多數は殺害さるゝに至れり。在興安蒙古軍官學校の如きは豫め叛亂を計畫しありしものゝ如く、九日興安の爆撃せらるゝや直ちに叛亂して興安軍司令官を逮捕逃亡す。十五日停戦となるや日系軍官は全其の職を滿系軍官と交代す。南滿に於ては相當險惡なる空氣あり

0589

りて特に錦州にありては極めて情勢悪化せるも満軍高射砲部隊の逃亡ありしのみにして叛亂は見られず。警察官も満系は開戦と共に保身の爲逃亡せる者多かりしも、日系警察官は相當活躍し、特に治安の維持、蘇軍の情報提供等に最後迄活躍せり。

々満人、鮮人、露人等の状況

満人

情勢の緊迫に伴ひ物資の供出、人員の徴用等により民心は完全に離反し徴用の身代り、供出損害の共同負擔等行はれ且國民政府に通じて身の安全を圖らんとするもの多く民心の動向は警戒を要するものありしが、八月十五日停戦の報傳るや奉天城内は忽ちにして全戸晴天白日旗を掲げ、十七日頃より満軍の逃亡叛亂と共に漸次治安状態不良となり日本人財産の掠奪を開始し暴行事件濫起するも尙日本軍嚴存しありたる間は治安を保持しありたり。十九日蘇軍入城し日本軍の兵器を暴民に與ふるに及び俄然暴動化し、北

0590

陵附近に於ては日本軍殘存部隊と對峙し小銃等を以て攻撃し來り
手榴彈等を以て之を撃退する等の如き狀況を呈す。

奉天驛前附近は最も治安不良にして二十一日よりは避難民及通行
人は凡て掠奪暴行を受け又日本軍空兵舎、官舎及日本人立退家屋
は一物も残さず掠奪を受く。平素日本人上官に對し反感を有せる
滿人警察官は蘇軍入城と共に日本人警察官を逮捕し機關を行ふ。
日本軍の奉天北方に撤退するに及び連絡の爲の通信線は全て滿人
の切斷する處となり又奉天、撫順間には匪賊出没するに至る。日
本人に好意を有せる一部滿人中には日本人を保護し或は便宜を與
えたるものありしも極めて僅少なり。

朝鮮人

停戰當初は滿人の報復を恐れありしも朝鮮國旗を掲げ、蘇軍入城
するや蘇軍掠奪の先導者となり日本人より掠奪せり。又蘇軍の爲
諜者となり密告する者多かりき。

0591

露人

全般戦局の不利に伴ひ在滿白系露人は蘇聯の工作により漸次蘇聯國籍を取得せるものを生じ、且諜報活動も活機化するに至る。蘇軍人城と共に日本軍側に協力しありし者の一部は天津、上海に逃亡せるも、大部分は逮捕せられ白系露人事務局員は全部銃殺せらる。又白系の一部は蘇軍の密偵となり積極的に蘇軍に協力せるも、結局大部の白系露人は蘇領に護送せられ叛逆人として殆んど處刑せられたるもの、如し。

第三節 第六十三師團の状況

一、北支より滿洲への轉進

要旨

63E は司令部を北京に置き北支那方面軍直轄の下に在石門の獨立旅團を併せ指揮して河北省燕京道、保定道及北部順德道地區の警備に任じありしが、昭和二十年初頭夫々北京及保定に於て新に編成

せし獨立警備隊に其の警備を移譲し同年五月北京及保定地區に集結し轉進準備及訓練の後同年六月上旬企圖を秘匿しつゝ滿洲國通

2 轉進準備

(1) 警備の移譲

師團は昭和十八年七月北京に於て編成以來所謂分散配置に依り警備に任しありしが、昭和二十年三月師團の増任の下に夫々北京及保定に於て編成せし獨立警備隊の編成完結するや同年四月上旬師團隷下部隊の警備の配置を概ね其の儘兩隊に移譲し當期若干期間重複警備の後隷下部隊を北京及保定地區に集結す。但し師團は依然警備任務を有し兩警備隊は師團の指揮下に入らしめられあり。

(2) 師團の編制改正

師團は所謂警備師團にして、歩兵二旅團（旅團は獨立歩兵大隊四—工兵隊一及輜重隊一並に野戰病院一より成りしを以て野戰

師團としては不備の點多く特に砲兵力及機動力に欠くる所あり。依つて先づ砲兵一隊（野砲四門）の編成を命ぜられ更に各隊の行李を編成す。

（イ）師團の教育訓練

師團は編成以來分散配置に依り警備任務に服しありしを以て野戰師團とは日常の戰團様式に著しき相違あり。歩兵各級隊長の如きは編成以來一回も其の部下全員を集合掌握せしことなき狀況にあり。依つて師團は獨立警備隊に固定警備配置を移轉するや隸下部隊を集結し兩歩兵旅團長掌握下各々警備地區内の活潑なる機動討伐を實施せしめ以て警備任務の積極的遂行と共に特に此の間に於て各級指揮官の指揮能力の向上、各部隊の機動、戰闘等野戰的訓練を實施し更に師團司令部以下各特科隊も夫々活潑なる野戰訓練を實施す。

（ロ）滿洲への轉進實施

昭和二十年六月月上旬師團は北支に於ける警備任務を解かれ滿洲國通遼地區に轉進を命せられ國境通過時を以て朝東軍の戰鬪序列に入らしめらる。本轉進に方りては特に企圖の秘匿に努め準備時期より鐵道輸送實施に至る迄万全を期し能く所期の目的を達し順調に轉進を實施し六月中旬新駐地に轉進を完了す。

三 滿洲轉進より蘇聯參戰迄の狀況

一 要旨

師團は滿洲轉進に依り第四十四軍の轄下に入り、司令部を通遼に置き鄭家屯―通遼鐵道線沿線の主要地（住民地）―打通線北部及開魯に駐屯し直ちに訓練に邁進す。次て新作戦任務を受領し師團は之に基き作戰準備に没頭す。右準備は有ゆる困難を克服して銳意之か完璧に努め相當の進歩を見たる際蘇聯の參戰を迎えたり。

二 移駐後の配置

0596

師團司令部

通遼

66B

主力を以て鄭家屯、一部を以て同地以西鄭家屯、通遼線の沿線主要住民地

67B

主力を以て通遼、一部を以て同地南方打通線沿線の主要住民地

尙歩兵一大隊を開魯に駐屯す

爾餘の部隊

通遼附近及鄭家屯、通遼線沿線住民地

3. 作戰準備の状況

(1) 師團の任務

六月下旬軍より爾後の作戦に關し命令あり師團の任務左の如し。

師團は主力を以て通遼附近、各一部を以て開魯、鄭家屯、通遼線上の主要地、特に鄭家屯附近に陣地を占領し遊撃戦法に依り所在に敵の東進を撃碎す。

(2) 兵力部署

0597

現駐屯配置を骨幹とせるものにして大なる變更なし。

(イ) 陣地構築

師團移駐後の新作戰任務に應ずる陣地の迅速なる完成は師團の夙に着意せる所にして居住設備の如きは既に最少限に止め前述べた任務を受領するや直ちに偵察、構築に着手せり。之が構築は所在の物料を以てする如く指示せられ軍より何等の補給を受けざりしを以て、一帯の沙漠地帯にして利用すべきもの無き師團は洞窟陣地の如き徹底せる工事は直ちに着手するに由なきも沙漠地の特性に鑑み先づ個人壕（たこ壺）を主体とするものにより相當の強度の陣地を構築し爾後逐次之を強化を圖ること、せり

(ロ) 資材の整備

兵器彈藥特に遊撃戰の爲の爆藥其の他の作戰資材は當初軍より補給なく教育訓練にも支障を來す状況にありしも逐次之を整備

0598

を爲し得たり。

(其の他

豫想作戰に應ずる編制裝備の改善強化等逐次實施す。

教育訓練

教育訓練は岸川師團長の特に意を用ひて努力せし所にして、北支に於ける轉進準備以來夙に着手しありし所なるも將來の作戰任務明らかとなるや直ちに之に應ずる教育訓練に着手せり。

即ち遊撃戰の教育を主体とし幹部に對しては更に指揮能力の向上に着意せり。

之か爲處置せし事項左の如し。

(イ) 吉林演習（關東軍に於て木下機動旅團をして實施せしめたる遊撃戰の演習）に參謀長を參加せしめ隸下の指導に當らしむ

(ロ) 鐵道を利用しモーターカーを走行せしめ敵戰車、裝甲車の實速を出し之に對し肉攻を訓練す

0599

一三三
（イ）師團長陣頭に立ち連日各部隊の訓練を視察するのみならず自ら之を指導す

（ニ）隷下各部隊は万難を排して連日訓練を実施する如く指導す
右の成果は着々之を挙げ得たり幸に師團は北支に於て共產軍匪の遊撃戦に相對し敵の逐年若心研究創意による日進月歩の同戦法に對抗しありし關係上、遊撃戦に就ては將兵を通し深刻に理解しありしを以て之か訓練も容易に成果を挙げ得たり。

5. 編制裝備
編制に就ては前述の如し。

裝備に就ては遊撃戦に應ずる裝備就中肉攻所要兵器資材（爆薬等を含む）の整備に努め蘇聯の参戦迄には概ね所期の如く完了せり。
6. 戦力

（イ）一般的觀察

師團は昭和十八年七月獨立混成第十五旅團を主体として改編せ

し警備師にして且編成以來直ちに分散配置に依り警備任務に服し共産軍匪に對し對遊撃戰に従事しありしを以て近代戰に應ずる編制特に裝備を有せず、砲兵力は臨時編成の野砲一隊（四門）に過ぎず、對戰車火器の如き皆無の狀況なれば其の戦力は一役野戰師團に比し遙かに及ばざるものと判断しありたり。

加ふるに編成當時は幹部も相當優秀（獨立歩兵大隊長は現役大佐）なりしも滿洲轉進時に於ては著しく低下（同大隊長は特進の大尉級）しありて、師團の近代戰に應ずる戦力は標準師團の50%以下と思料す。

然れども軍の對蘇戰は徹底的に遊撃戰に終始せんとするものにして優秀なる指揮官の下、諸兵種の統合戦力を發揮し更に戰略戰術的運用の妙を以て勝を制せんとする正道の作戦に非ずして最下級幹部以下の實施する個々の遊撃戰團の綜合戦果に勝敗の決を求めんとし司令部の如きも一度戰團の開始後は全員が各々

0601

一遊撃戦闘員たらんとする原始的作戦なれば、斯かる戦闘に於ては北支に於て連日連夜對遊撃戦に終始せし師團としては最も得意とする所にして其の戦力は本來の在滿兵團の追隨を許さざるものありと思料す。

尙師團の志氣は能く高揚しありたり。即師團は北支より他に轉用せらるゝことを昭和二十年初頭に承知せし以來いづれ決戦正面に於て玉碎するものと覺悟しあり其の滿洲轉進も亦其の覺悟を以てし寸暇を惜んで次期作戦の準備教育訓練に邁進しありたるを以て其の志氣は十分に高揚せられたり。

(四) 數量的觀察

a 師團は警備師團の編制に若干の野戦對應の改編を實施せしものにして總兵力は固有編制に應ずるものと殆んど差異なく北支に於ける損害の補充も亦行はれありて編制に應ずる完全なる定員を保有しありたり。

兵器亦損耗少く編成當時より精低下せる程度なり。彈藥資材は轉進時には最初の會戰用のものをも保有しあらざりしも蘇聯參戰時には相當充實しありたり。

三、蘇聯參戰當時及爾後の狀況

1. 師團は幾に示達せられたる作戰計畫に基き當時諸準備を完了しあり。師團の正面に對する敵の進入明らかとなるに及び既定計畫に依り先づ最前線の開魯に在りし獨立歩兵第七十七大隊をして將に遊撃部隊として進發せしめんとする際十日後退の命に轉す。

2. 師團は前述の如く蘇聯參戰後、日ならずして現配備を撤し奉天東陵附近に陣地を占領して隣接兵團と共に奉天を守備すへき任務を受け、奉天に向ひ轉進す。

右移動は十二日午後より鐵道輸送に依り圓滑に實施せられ、最前線開魯の如きも敵の侵入に先たち離脱し得たり。但し居留民をも併せ後退する爲相當困難を感じたり。

3. 爾後逐次到着する部隊を以て陣地占領に着手し概ね師團半部を輸送せしとき停止となる。

四 終戦時の状況

1. 態勢

師團は前述の如く未だ敵に觸接することなく軍命令に依り奉天に後退し、約半部は東陵附近に陣地占預、他半部は鐵道輸送中なり。

2. 戦力

蘇聯參戦前に同し

3. 武装解除の状況

八月十九日蘇側軍使飛行機に依り奉天に到着。八月二十日師團長は「蘇軍軍司令官の到着を迎ふる爲飛行場に集合すへき」示達を受け同様集合せる在奉天の全將官と共に飛行機に依り立致せらる。爾後師團は一地に集合の上武装を解除せらる。

4. 爾後の推移

其の後師團全員は北陵收容所に收容せられ此處に滞在十月中旬に至り入蘇の爲輸送を開始す

此際尉官以下は全部作業大隊に編成し（大隊は1500名）佐官は同收容所に在りし他兵團等のものと合し將校大隊を編成し出發す。

但し第67旅團長橋場大佐は部下を思ひ自ら進んで作業大隊長となりて出發せり。師團は各作業大隊共佐官を以て隊長に充當せんとせしも、橋場大佐のみ出發し得たる外他は禁止せらる。

第四節 第百十七師團の狀況

第一 蘇聯參戰迄の狀況

昭和二十年五月下旬師團は新郷（北支）に於て滿洲洮南附近に轉進すべき命を受け六月中旬極秘裡に行動を開始し六月末日迄に概ね輸送を完了す。（當時尙歩兵二個大隊は老河口作戰に参加中なり）

2 八月五日頃に於ける師團の態勢要圖第一の如し。

3. 八月六日第四十四軍の作戦計畫及之に基く陣地構成計畫等を受領し之に基く師團の計畫を立案中にして八月十日部隊長會同に依り示達すべく準備中なりき。

第二開戦より終戦時迄の状況

1. 八月九日開戦と共に同地域に在る獨立速射砲第二十九大隊を師團の指揮下に入らしめらる。

2. 八月十日各部隊長を集合せしめ取敢えず陣地構築に關し命令す。

3. 同日禮泉副隊長より「土民の言に依れば戦車數千台禮泉方向に前進中」との情報を電話を以て通報し來りたるを以て、直ちに206大

隊^{29TAS}を洮南西方約三〇軒附近に前進せしめ敵の前進を阻止せしむる如く處置す。

4. 十日午後電話に依り「第一百十七師團は速かに新京に轉進し第三十軍の指揮下に入るべし、指揮轉移の時機は新京到着時とす、轉進の爲十二日夕より列車十二列車を配當す」の軍命令を受領し之

0606

が準備をなす。

5. 八月十一日早朝開通地線より 588 大隊を渭南に轉進せしめ該地區を
増強す

6. 十二日十八時頃軍より一列車なきを以て行軍に依り轉進せられ度
し一との電話通報を受け、直ちに計畫を變更し別紙要圖第二の如
く二機隊となりて轉進を開始す（渭南出發十三日零時）。

7. 左縱隊は極力列車を利用し十四日大營にその大部到着す。第八十
七旅團長は電話に依り瀋東軍と交渉し師團主力の列車輸送を懇請
せるものの如し。

8. 師團主力縱隊は十五日朝平安嶺（大營西方五汗）に到着、同地に
於て DTL 無線に依り停戦を知る。

9. 師團の行軍間敵機の行動活潑ならず。十三日晝間及十四日夜我が
上空を旋回（照明弾投下）せるも攻撃を受けず（十三、十四日は
雨又は曇）。

10. 北支より滿洲に編進中の歩兵二大隊は天津附近に於て終戦を知れるものの如し。

第三終戦後の状況

1. 停戦を知ると共に師團主力を勉めて列車輸送すべく努力しその大部を新京地區に集結すべく處置す。

2. 師團長及幕僚其他所屬の者は新京に先行し十六日早朝關東軍總司令部に到着し連絡の結果師團を公主嶺に集結するに決す。

3. 鐵道輸送に依り公主嶺に輸送を開始せるも蘇軍の進入に依り一部

(2041 大Aの一部、P一中、DTL)を新京に殘置せざるを得ざる状況となり

なり新京、公主嶺の兩地區に於て武装解除せらる。

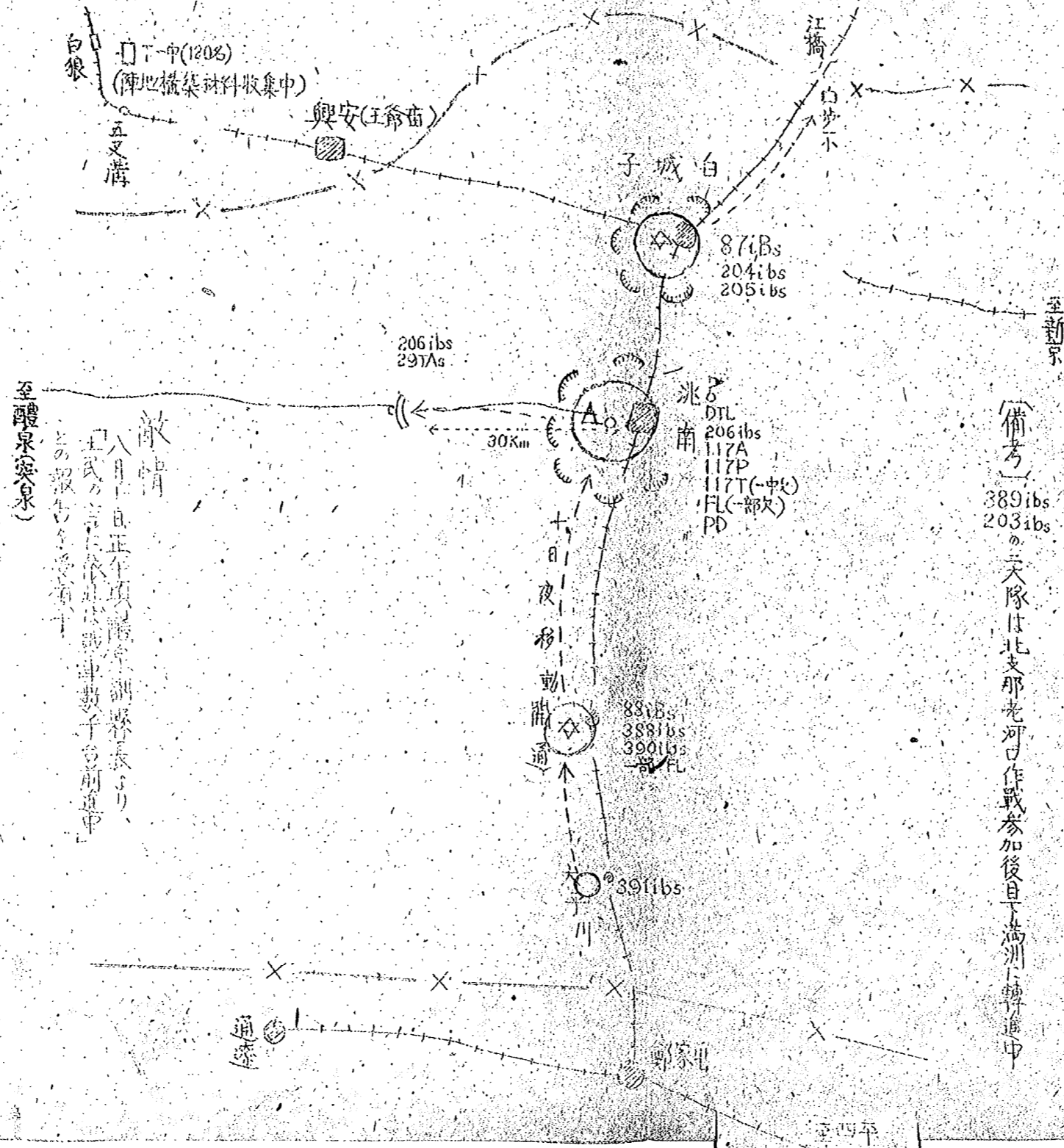
4. 北支より編進中の歩兵二大隊は十八日新京に到着し十九日公主嶺に逆輸送せられ公主嶺に於て武装解除せられたり。

0608

第十七師團態勢要圖

(自昭和二十年八月五日頃 至蘇聯參戰當時)

第一圖



敵情
八月五日正午頃敵情不明瞭、
王民の言に依り、敵軍數千名附近中
との報告を受け、

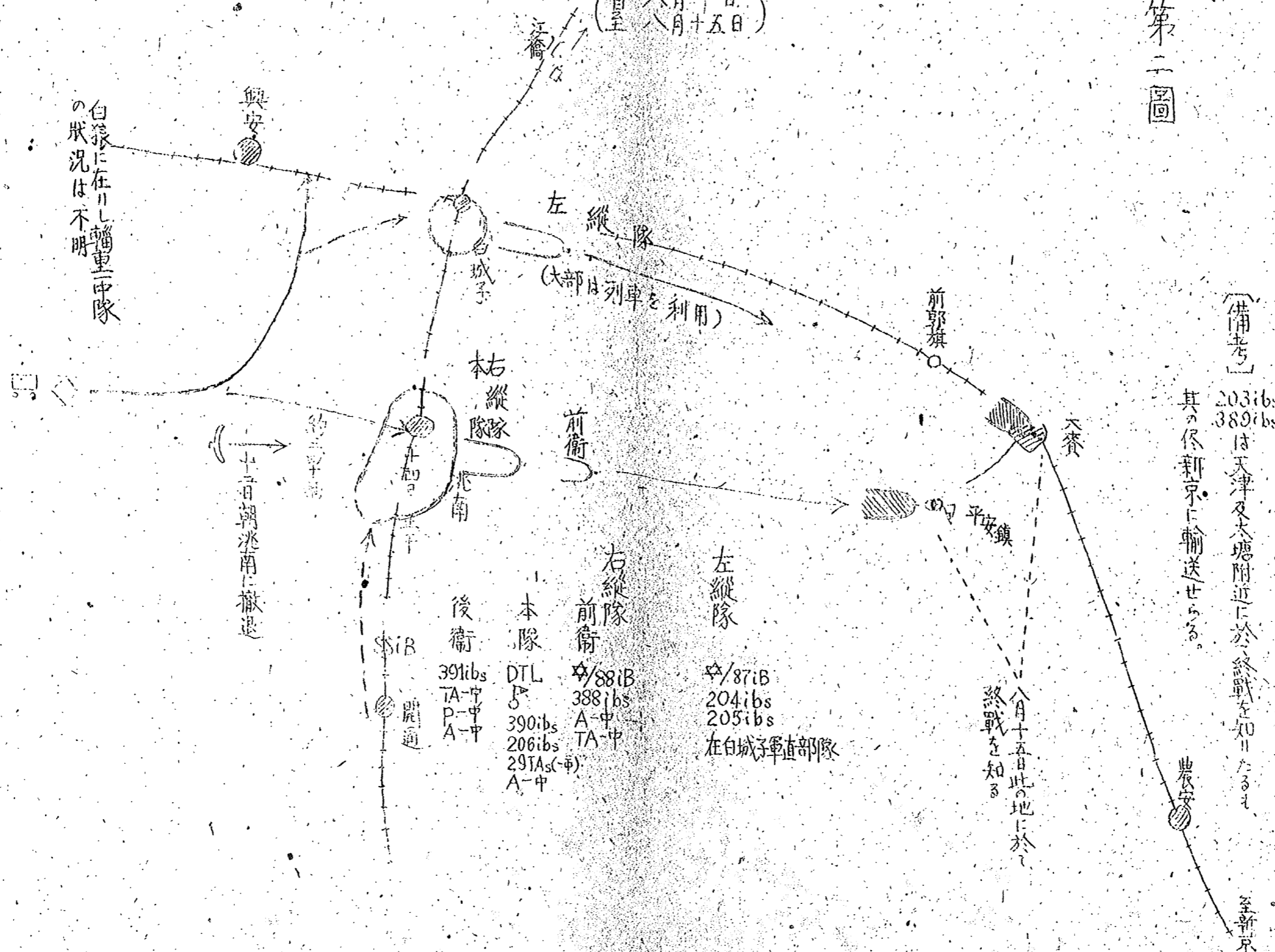
〔備考〕
389iBs
203iBs
天隊は北支那老河口作戰参加後自滿洲轉進中

0609

第十七師團態勢要圖

(皇八月十五日)

第二圖



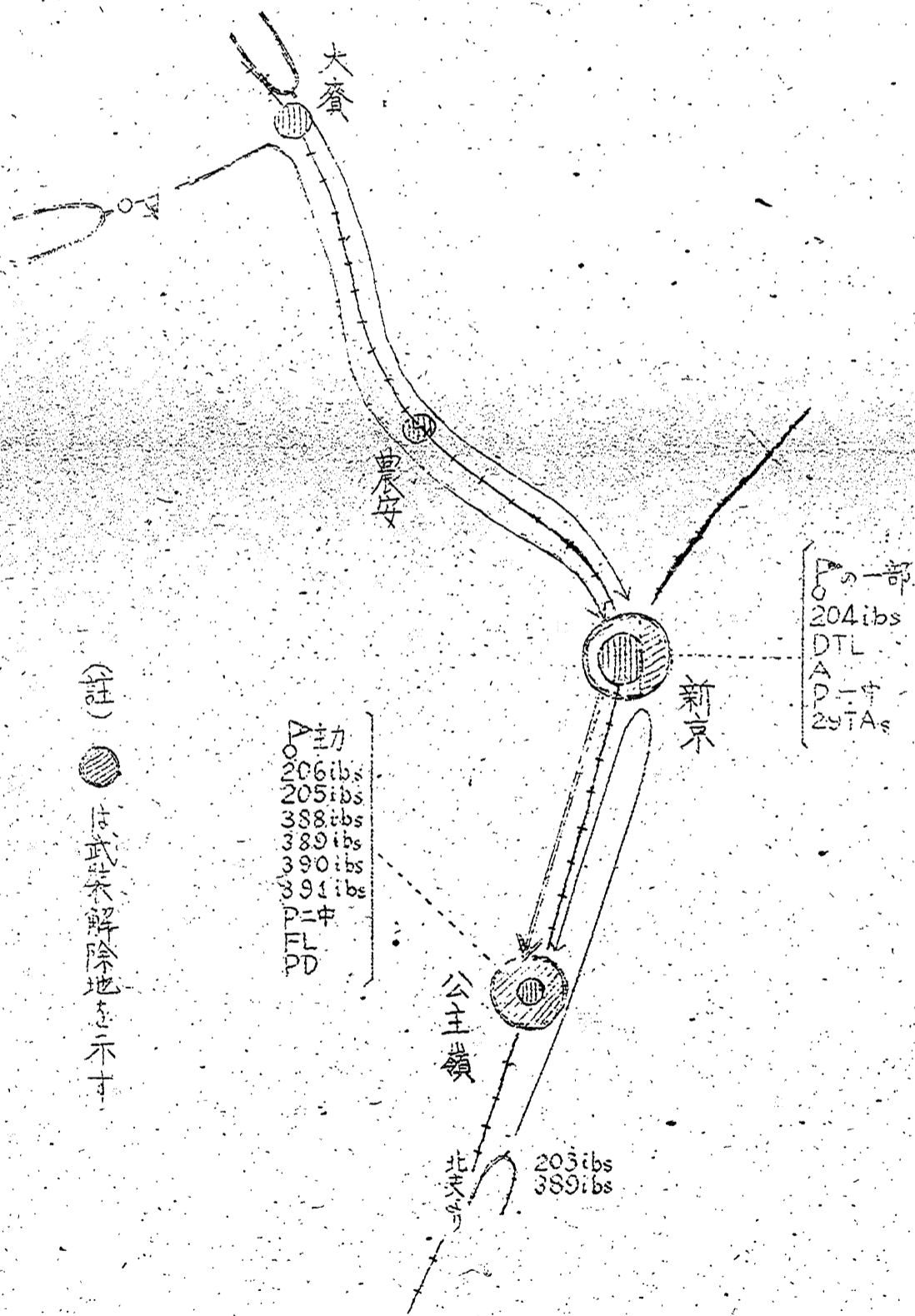
〔備考〕
203ibs
389ibs
其の係新京に輸送せらる。

0610

第十七師團行動要圖

(自八月十五日
至武装解除)

第三圖



0611